

草丈10㌢で芽1つに

——永田 茂穂

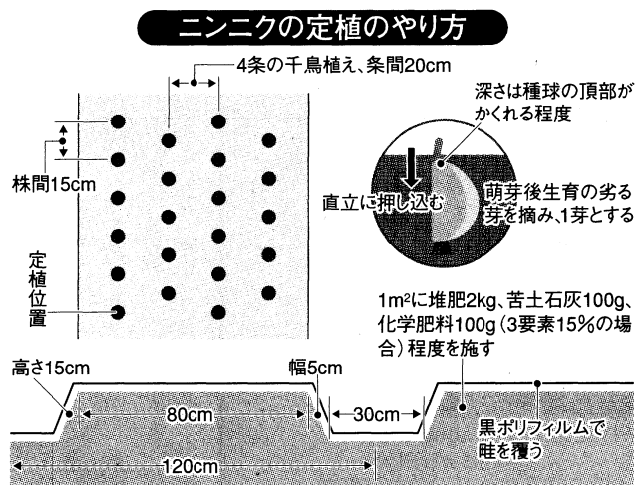
ユリ科の多年生草本で、原産地は中央アジアといわれています。日本へは千年以上前に中国から渡来し、昔は滋養強壯の薬効に着目した薬ともて利用されています。

刻んだり、すりおろしたりすると、臭みの元になる「アリシン」が生成され、強烈ににおいます。他にビタミンBなどを含み、疲労回復や強壯、殺菌効果などを発揮します。

品種には、外皮が白く大球でりん片が少ない寒地系やりん片が多く球が小さい暖地系などがあります。また、花茎（芽ニンニク）や葉を利用する品種もあけます。

生育適温は15～20度で、暑さに弱く、寒さには比較的強いです。球の肥大を促すには、生育の途中、冬期の低温にあう必要があります。ここでは、鹿児島県在来の品種を用いた秋植え春どりの普通栽培を紹介します。

植え付けの適期は9月下旬～10月上旬です。植え付けの1週間前までに、排水の良いほ場を準備します。1平方メートルに堆肥2キロ、苦土石灰100グラム、化学肥料100グラム（3要素15%の場合）程度を施し、耕うんします。乾燥防止などを目的にマルチ栽培をします。土に適度な水分がある時に、うね幅120㌢、床幅80㌢、高さ15㌢程度のうねを作り、市販のマルチ用黒ポリフィルムで覆います。



種球として、1個ずつに離したりん片を準備します。種球が大きいほど球が大きくなります。植え付けは株間15㌢、条間20㌢程度で、4条の千鳥植えにします。植え付けの深さは種球の頂部がかくれる程度で、直立に押し込みます。植え付け後は十分にかん水します。

萌芽後、1株から2芽出た場合は、草丈10㌢程度の時に、生育の劣る芽を摘み、1芽とします。また、春先になると花茎が伸びてきます。早めに摘み取り、球の肥大を促進します。なお、摘み取った花茎は芽

ニンニクとして利用できます。

収穫期は4月下旬～5月上旬です。茎葉の3分の2が黄化したころです。収穫後、根と茎葉を除去し、ネットの袋などに入れ、日陰で風通しのよい場所につるすなどし、よく乾燥させて保存します。

(鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部長)

平成21年10月8日(木) / 南日本新聞